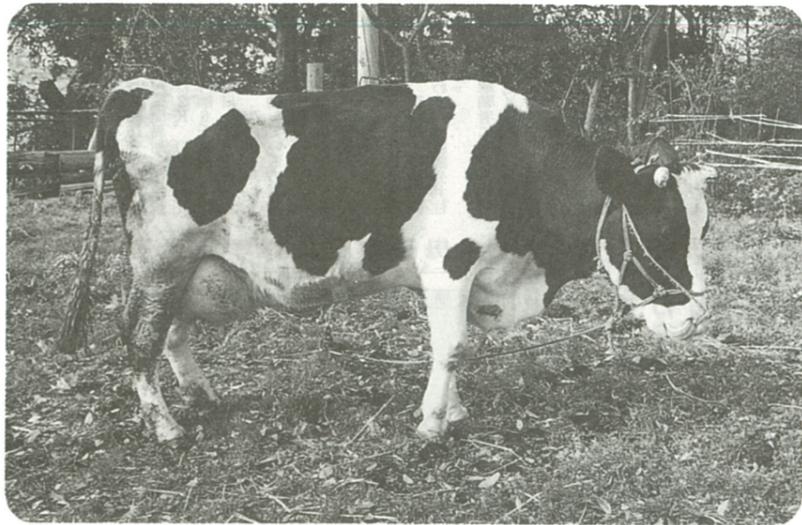




走れ海老名の新風

「おお汗こ汗・みんなで参加」
が「かながわ・ゆめ国体」の合い
言葉です。海老名市でも市民一人
ひとりが自発的に自分たちの考え
と行動で、「活力のあるまち」に
していこうと動き出しています。
皆さんが持つ将来の夢や幸せ
は、ただ待つだけでは実を結ばな
いと思います。新しい年への期待
は、皆さん自らが創りだしてい
くことではないでしょうか。
平成9年：輝き、躍り、羽ばた
き自らが能動的に動き出さなけれ
ばならない年としたいものです。
一緒に走りだす海老名の風に乗
ってみませんか。



牛歩で

今年(うし)年です。牛は私たち人間にとって昔から大変かわりの深い動物です。牛というのんびりしているという印象が強いですが、一步一步着実に進んでいく姿には、凄いエネルギーを感じます。ここでは、丑年生まれの方で名前に「丑」の字が使われている方、元日が誕生日の方から、去年1年間の感想、今年の抱負などを伺ってみました。

丑年の人に聞きました

還暦を迎え さらに元気に
高橋 丑松さん
(会社員 昭和12年10月5日生まれ 上今泉在住)
「去年は、家族共々健康な1年でした。それと、趣味のゴルフを通して仲間がたくさんできました。仕事に趣味に忙しい1年で、あっという間に過ぎた気が

がします」と話す高橋さん。ゴルフを始めたのは55歳になってからで、体を動かすことによって、年々コレステロールの数値が減ってきて、より健康になりました」と話しています。



「去年は、結婚して25年の銀婚式の年でした。新婚旅行のときに行った金沢に、今度は家族で行って来ました」と話す高瀬さん。

「去年は、下の子が一昨年の12月に生まれたので、兄弟ができて家の中がにぎやかになりました。子育て中心の1年でした」と話す濱田さん。

「去年は、仕事の内容が4月に変わって覚えることが多かった。忙しかった1年でした。それと出来事は、家族と住んでいる家を改装したことです」と話す波多野さん。

「去年は、10月に修学旅行で日光に行ったこと、夏休みに家族で鹿児島県の親戚の家に遊びに行ったことが楽しかった」と話す宮里さん。

「去年は、10月に修学旅行で日光に行ったこと、夏休みに家族で鹿児島県の親戚の家に遊びに行ったことが楽しかった」と話す宮里さん。

「牛」あれこれ

牛は、十二支の2番目、ウシ目(偶)で、ウシ科の動物です。ウシ目の仲間には、インシシ、カバ、ラクダ、キリンなどがいます。牛には肩が4つあって、「反す」といって、一度飲み込んだ食べ物をも再び口の中へ戻し、かみ直して再び飲み込むことは、よく知られています。家畜としての牛には、野牛、水牛などがいます。牛が家畜として飼われたのは、新石器時代あたりからと推定されています。日本でも、縄文時代に牛が飼われていたという説があります。そして、牛車(ぎし)といっって、牛に引かせた乗用の車輪は、平安貴族の乗り物で、今でも、ひなまつりのひな段に飾られています。市内には、12件の酪農家があり、約300頭のホルスタインと呼ばれる乳牛が飼われています。その牛たちからの生乳の生産額は、米、イチゴ、トマトに次いで第4位になっています。農家が飼われている牛には、1頭1頭名前がつけられています。撮影にお邪魔した農家は、それぞれ名前がつけられていました。みんな同じに見える牛たちをきくと見分けられることがよくあります。牛という、何かのんびり歩いている印象が強いですが、走り回ることもあります。そして、ジャンプすることも出来るそうです。取材した農家の牛が、北海道から初めて来たときに、運ばれてきたトラックの荷台から降りた後に、環境の変化に驚いたのか、突然、またトラックの荷台に飛び乗ってしまったそうです。



「去年は、結婚して25年の銀婚式の年でした。新婚旅行のときに行った金沢に、今度は家族で行って来ました」と話す高瀬さん。

「去年は、下の子が一昨年の12月に生まれたので、兄弟ができて家の中がにぎやかになりました。子育て中心の1年でした」と話す濱田さん。

「去年は、仕事の内容が4月に変わって覚えることが多かった。忙しかった1年でした。それと出来事は、家族と住んでいる家を改装したことです」と話す波多野さん。

「去年は、10月に修学旅行で日光に行ったこと、夏休みに家族で鹿児島県の親戚の家に遊びに行ったことが楽しかった」と話す宮里さん。

「牛」のことわざ

牛は馬に引を取って、他にも「牛馬にも踏まれぬ」「子供がもたない成長する」「牛がいななき馬がほえる」「物事がさかさまに」「牛も千里馬も千里」「巧拙運速の違いはあるもの、結局は同じ所に到達するものなど多きことわざがあります。その他にも「牛に引かれて善光寺詣り」は、他の原因や他人の誘いによって、その道に入り、または偶然到達することなどにも使われます。「牛歩戦術」は、牛の歩みどおりに進んだら、だんだん進んでいくことと思われ、言いは牛のよだれ」という言葉もあり、細く辛抱するのがよいことわざです。「男と牛の子は急ぐものではない」というようにゆつたりと構えようということわざ。

「も21世紀へ着実に



十二支の牛は聖獣 天よりの使者

印度では、牛は人類のために天が地上に降した「聖獣」として、食用にしないため市中でも自由にのびのびと生活しているといわれたことがあるが、日本でも農耕や重い物の運搬には欠かせない重要な家畜として食用にはしなかった牛を食用にするようになったのは、西洋文化が盛んに取り入れられるようになった明治以後のことである。牛は五力(力、人、人間の五倍の力がある)とされ、聖武天皇がこの地に相模の園分寺建立の折も重要な労働力として、たくさん牛が協力したと伝えられている。後で運んできた大きな礎石はどうしても台地へ引き上げることができなかったが、白い牛に乗った白衣の童子があたりを回り、たくさん白い牛が次々と台地へ引き上げたという一説の白牛の伝説はこれを物語っている。牛は労働力ばかりでなく、栄養のある牛乳を人間に提供してくれる。牛乳によっていかに多くの乳幼児が育ち、たくさん病人が救われ、あまたの老人が養われてきたかと思えば、天よりの使者聖獣とは想いしほひ呼び名であらう。修業に疲弊果てたお釈迦様も、ブツダガヤの森で乙女の捧げた牛乳によって、生気を回復して覚を開かれたのである。英国の医師ジェンナーは、ワクチンで天然痘を予防したが、牛痘に感染した牛乳しぼりの婦人が天然痘にかからないことからヒントだった。ワクチンという言葉は、雌牛というラテン語のワッカが語源である。牛が水を飲むばらとなり、蛇が水を飲むば毒になる。と古書にあるが、同じ水でも飲む者の体質によって命を奪う栄養ともなれば、反対に命をそこなう毒にもなる。同じように金には善悪はないが、持つ人の考え方、使い方によっては悪の金となって世を乱し人を苦しめ、また反対に人を救世の金にもなる。この水、金を入れ替えて人にあるは、善人の金は世を益し人を救い、悪人の金は人を苦しめ世を乱すものとして、丑年の年頭の言葉とした。このお話は、小島直司さんが執筆されました。

広報 えびな

編集・発行
海老名市役所秘書広報課
〒243-04
神奈川県海老名市勝瀬175
☎ (0462) 31・2111

この広報は再生紙を使用しています。

